

# ビワズ通信



## きれいな水って、どんな水。

地域の暮らしと文化をになうヨシ。  
豊かなヨシ地の復元をめざす植栽事業。  
琵琶湖が生んだ最高級「浜ちりめん」。  
名水と近江米がはぐくむ滋賀の酒。

水をテーマに環境を考える市民グループ「アクア・ネット」

## 【生命をはぐくみ、琵琶湖を守るヨシ群落】

日本は、古くから「豊葦原瑞穂の国」とも呼ばれ、美しいヨシが生い茂り、秋の実りが豊かで水を満々と湛えた国でした。なかでも、近江には壮大なヨシ原が広がり、琵琶湖ならではの風景を形づくっていたといわれています。今日も、人々の心に豊かな風情をもたらすヨシ原は、単に景観だけではなく、いくつもの恩恵を人と自然に与えつづけています。



オオヨシキリ

毎年、ヨシの群落では、オオヨシキリをはじめ約100種類もの野鳥が巣をつくり、ホンモロコやニゴロブナなど数多くの魚が産卵し、稚魚を育てています。また、このほかに、さまざまな底生動物や昆虫類の貴重な生息地としてヨシ群落は琵琶湖の自然環境や生態系にとってかけがえのない場所です。さらに、ヨシは水中の窒素やリンなどを栄養分として吸収するため琵琶湖の水質を浄化するとともに、打ち寄せる波を和らげ、地下茎によって湖岸の浸食を防ぐという役割を果たしているのです。県の淡海環境保全財団の委託を受け、ヨシ群落の維持管理に取り組む琵琶湖ヨシ環境事業協同組合(近江八幡市)の副理事長 川嶋茂久さんは、次のように語ってくれました。「ヨシというのは不思議な植物で、毎年、刈らないとどんどん弱っていきます。手を入れて、丹念に刈り取ってやると、翌年には元気な芽が吹いて、青々とした美しいヨシが生えるのです」。だからこそ、昔から人々は、雪が積もり、陸での作業ができなくなると厳寒の湖に入ってヨシを刈り、翌年の芽だしのために、刈り跡を焼くという作業をくり返してきたのです。人に生かされるヨシと、ヨシに育まれる琵琶湖の自然。この素晴らしい関係こそが、私たちが次代へと引き継がなくてはならない人と自然との共生のかたちといえるのではないのでしょうか。